

# 都民塾からのお知らせ

都民塾事務局

拝啓 厳寒の候、皆さま方におかれましては益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。既にご存知かと思いますが、旧臘 28 日（水）午後 11 時 10 分、都民塾々長・立石晴康が不帰の人となりました。

平成 24（2012）年 11 月に産声を上げた都民塾は、当時、中央区選出の東京都議会議員として活躍していた立石晴康が、強い信念のもとに立ち上げた私塾でした。「政治への強い不信感が蔓延している今、みんなで政治や経済、国際問題などの情報を高め、共有し合う勉強会を持とう。この国を衆愚政治にしてはいけない」というその言葉通り、各界より多岐に亘る魅力的な講師を招き、月一回の開催を続けてまいりました。

塾長として参加した最後の都民塾は亡くなる二週間ほど前、奇しくも令和四年最後の開催回でした。都民塾はそれまでに 96 回を数えていたのです。これは毎回「日本で今、何が起きているのか？」を知ろうという趣旨に共感くださった皆さま方のお力添えがあったからに他なりません。

日本が先導して近未来の新世界秩序を創造すべきだ——。都民塾々長・立石晴康が繰り返して強調していた言葉です。そのために大切なことは、人間力、経済力、科学技術力、文化力、防衛力、等々。

これらをダイバーシティ（多様性）の中で磨いていくことが大切なのだ——と。混迷する世界は今、多様性を求めています。性別、年齢、人種、国籍、宗教、学歴、職歴の垣根を超えた「地」にしか、心の繁栄、友情の繁栄、商売・会社の繁栄はないという主張です。

塾長なき後も都民塾は、これらの繁栄を目指す役割を果たす所存です。それが「都民塾は出来る限り続けてほしい」という立石晴康の遺志だからです。従いまして、忌明けする 2 月 21 日（火）に、今年最初の都民塾を開催する予定です。詳細はまた追ってご連絡を差し上げます。末筆ながら皆さま方のご健康とご多幸を心よりお祈り申し上げます。 敬具

令和 5 年 1 月 14 日

※ 次ページ以降に都民塾世話人代表・野口和久の「追悼の辞」と塾長・立石晴康が最晩年にしたための書を掲載いたします。

## 追悼の辞

# 天晴れな政治家人生

都民塾・世話人代表 野口 和久

訃報は、どんなに親しくしている人でも、何の前触れもなく飛び込んで来る。僕の父の教え子で、新聞記者時代に親しくなった立石晴康さんが旧臘、卒然と不帰の人になった。享年 81。中央区議 3 期、東京都議 8 期を地元のために尽くした、天晴れな政治家人生だった。半世紀を超える交流で、変わらぬ貴方の友情に報いることができなかつたのが辛い。

「悲しい知らせがあります。昨日夜、立石先生が亡くなりました」。都民塾の仲間の白井康裕さんから昨年 12 月 29 日午前に電話があつた。白井さんの声は泣いていた。突然の訃報に接した僕は驚き、しばらく言葉を失つた。

立石さんは、兄と慕い、師と仰いできた恩人だった。一緒に立ち上げた勉強会「都民塾」の同志でもあつた。立石さんが塾長で、僕が世話人代表で、あと 4 回で 100 回を迎える寸前だった。都民塾の会場・講師探し、一緒に旅した海外視察などたくさんの思い出が走馬灯のようによみがえつた。

立石さんは、昭和 16 年、中央区日本橋に生まれた。明治大学政経学部から同大学院を修了後、46 年、29 歳で中央区議に当選、3 期務めた後、39 歳で東京都議になり 8 期務めた。都議会の要職を務めて当然という経歴の持ち主だった。

しかし、千代田区丸の内にあつた都庁舎の新宿移転や中央区の築地市場の豊洲移転のさい、与党・都議会自民党に属しながら反対を押し通した。「僕は 2 度も党の方針に反対した確信犯だから」とポストよりも地元の声を尊重する信念の孤高の政治家だった。

僕の父が中央区立久松小学校の教員をしていたときから知っていた。ぐっと身近になつたのは、僕が新聞記者として 60 年の中央区の都議会定員が 1 人区になつたときの取材だった。「自公対決」で両党の大物が応援に駆け付け全国的な話題になつた。

都民塾は、平成 21 年、立石さんが 8 期目を目指したとき、民主党の風が吹き落選、浪人中に誕生した。「政治への不信感が広がっている。みんなで政治などの認識を高める勉強会をやりましょう」と僕から持ち掛け、立石さんも賛同して実現した。

会場は、当初、東京シティエアーターミナルなどを転々としたが、平成 25 年 5 月から築地本願寺のご厚意で同寺講堂が会場になつた。回を重ねるにつれ、講師もテーマも政治

だけでなく経済、文化など多様になった。参加者も毎回、90人前後と安定した。

都民塾が始まった当初、立石さんは「いつまで続けられるかな」と心配していたが杞憂に終わった。昨年12月15日の96回都民塾には、立石さんも元気な姿を見せ、挨拶もされた。この日は誕生日で、みんなから祝福された。それから2週間後の急逝だった。

立石さんとの海外視察は、毎年夏に1週間程度、立石ファンの20人前後が参加、世界の各都市を回り、特色ある街づくりなどを視察する。これまで、僕はイタリア、英国、クロアチア、メキシコ・キューバ、スリランカなどの旅に同行した。

思い出に残るのは、メキシコの旅。現地に長く住む僕の大学の先輩が夕食に招待してくれた。食後、現地に住む日本のご婦人と『ふるさと』を合唱したが、我々が歌詞を間違えると、ご婦人たちは『日本人なのに歌えないの』と怒った。望郷の念に思いを寄せた。

立石さんは、僕の父の葬儀で「野口先生は、都心育ちの我々を埼玉東部の自宅に呼んでくれ、近くの古利根川でシジミ取りの体験をさせてくださいました」と弔辞を読んでもくれた。都心の政治家でありながら、どこか土の匂いのする政治家だった。

貴方は、与えられた場所にしっかり立ち、見事に生きた。決してぶれない政治家人生は誇っていい。半世紀を超える付き合いで、さまざまな刺激を受けた。ありがとうございました。あの姿をもう見られないと思うと寂しい。おつかれさまでした、これからは、ゆっくと休んでください。

〔『市ヶ谷レポート No.215』より抜粋〕

如く川の流水は  
絶えずして  
しき元の水に  
あらず  
晴康



塾長・立石晴康が昨年10月に揮毫。鴨長明『方丈記』冒頭の一節